



和歌山國志

三

ル 4
3221
3



門 凡 4
3221
巻 3

山 勝

利根川圖志卷三

下總 布川 赤松宗旦 義知 著

新利根川

寛文二壬寅年押付松木行徳今この二村廢して押付村持添不松木分行徳分

の名を申田切等の地を鑿りて新川を十六島不達す開の時鑿

ハ今これを壑原新田といふかて布佐の高臺と布川の

間不堤して川を塞ぎメキリといふかて水を新川入る寛文六

百午年不落成す然れども太直不して水竭き易く舟行不便

りざるを以て同九己酉年塞を去り新利根川の口を塞ぎ別に

羽根野の水門を開き養養川の水をせき入れ用水の便とす明

る十庚戌年功畢る後天保十己亥年この堰を豊田村同十一辛

亥年より十三癸丑年まで大堤を修成す以前ハ敷ハ尺許寛保

二年壬戌洪水不壊りる間部若州彦與りて修補す築下總州新

及分流支派之堰延衰二十五里首自下總州相馬郡河原代村押

付新旦度發常陸州河内郡尾距下總州杏取郡結佐村とその他

昭和九年九月三日 購求

督あり一植田左仲命結が羽根野 明三年癸亥四月功成る
村稻荷山不建て一碑文不見ぬ
奥山 新利根川 蠶養川の間ある一帯の丘山の上不在りこれを

下れば常陸の龍崎等すへて一望の平地ありこの地始ハ岩を
置きて布川の豊島家より守りしが後龍崎土岐大學不奪ハれ
一を上の時押戸の原不も極岡見中務少輔信貞常陸國河内郡
の長臣栗林下總守義長が計不て土岐不乞ひて布川不還附せ

常總軍記卷十六云行方の合戦ハ兩土岐利まくりて歸陣せし
が土岐大學諸臣を集めて申しにるハ中畧この河内郡ハ下總
國相馬の北郡不隣りしと文間原唯一重不して敵地不近し
爰不村川の横須賀の奥山ハ本注私曰今横須賀奥山村と郷を
無く横須賀の奥山あり横須賀の村と郷を
り須藤堀といふ村あり横須賀の村と郷を
り龍崎不守むありその頃ハ無し此れハ領地の新田あり生馬
いふ足輕居とる所ありとぞ今不御弓新田といふとあれハ何

後年出來り中畧村ありこの所常陸下總の境不て文間原と
いひ田切といふ村と新田あり頃横須賀より立木といふハ續に
の頃ハ無之といふ村と新田あり頃横須賀より立木といふハ續に
谷中あり文間大明神あり今頃立木あり民家少々あり大房又
ハ高砂佐沼皆葎原あり圓明寺ハ千葉の建立あり文間神明ハ
古横須賀村の豊島紀伊守が次男不て半之允岩を構へり
分あり伊守頼継の子主水彼を追落して奥山を出張とすべ
頼言その弟半之允といふ彼を追落して奥山を出張とすべ
一彼處ハ並ちき要害あり若これを畧りずハ千葉が勢攻來て
奥山不籠り當地を窺ふ不於てハゆし難義あるべしこの
事如何ありむと評定すいづれと承りて至極せし御事あり何
ともあれ兵を出して一攻して通塞を御覽可然と申し九れハ
然りハとて諸岡角三郎一子衛門大野大隅淺野一郎右衛門森
左京中島權亮を大將として三百餘騎不て押懸ルりこの所
龍崎より相隔る事一里許あれハ道の難處も無く攻付れと

川北

二

りかぬて隣國の境目あるは油断すべき非ずして常遠見
の櫓を上にて兵を付て置き、若異變ありは螺を以て知
りむべしと號令を施し、故番兵どもこれを見て急不螺
を吹立て告ぐ、くはすハや敵こそよせされとて、若ハ大不駭
動す若の主豊島半之丞固より名を得、勇士もて鎧取て投懸
け十文字の鎗押取て馬不打乗り者共續け、北坂不乗出、て
戦ひ、くハ我どくと家人共甲冑を帯て北坂不向ひ、りそ
の勢漸五十人、ハ足らざり、半之丞眞先かけて嵩より追
落し、れハ土岐勢ハ坂下不在り、殊、この頃雨下りて赤土交
ある滑坂、れハ働自在、ありず、て討、る、者多く、とつと崩
れ敗北せり、あハや城方討勝つべうり、る、半之丞運や盡き
まり、む誰射るとも無き、鶴羽の矢、一飛來て半之丞、右の
膝口不ず、バと立つ痛手あり、れハさ、この半之丞と、まう

ず、て馬より落ち、り、る、土岐勢ハこれを見て、大不勇を爲
し、守返、て攻上る城方ハ色を失ひ、半之丞を介抱、て若、引
返す、固より纏ある小勢と雖、半之丞勇敢の者、不て戦ひ、る、故
不、こそ勝利ハ得、され、大將深手を負ひ、くハ残る面々度を失
ひ、足弱を引連れ、半之丞を宥、引掛、て、存川若、不引返、せり、こ
の時、存川の豊島紀伊守ハ折悪く、千葉、小金の矢、葺大膳、雌
伏せざるを攻む、べしと紀伊守と成田の成田八郎武田左近等
不、下知、し、され、彼處、不、在陣、て留守あり、る、不、嫡子主水ハ
所、勞、不、犯、され、惱、居、れ、ハ勢を集むる、不、以、の外、不、勢、不、て
漸、三十人許、あり、兩手の勢を合ハする、と、土岐勢、不、ハ掛合、ひ
難く、殊、不、兩、大將共、不、かくの如く、あり、く、ハせむ、方、無く、若、や
存川を、不、攻む、へき、不、ヤ、と、根本平六横田庄九郎白井半大夫等
の家臣、下知、して手配、して待ち、く、く、とも、土岐、と、戦、疲、れ、れ、ハ

三 川北

三

奥山を乗取り一計ふて勝鬨をあげ若引入りこの由龍崎へ
注進して敢て存川をバ攻めざりぬる

文間明神社

兩社あり西なるを角官といふ額蛟蛸神東を奥宮

といふ正一位文間大共立木村在り丘山の上ありこの丘

木奥山大平北方早尾羽根野を連ぬ即延喜神名式ある相馬郡

西行引新利根川の入口終る蛟蛸神社あり惣國風土記下總國相馬郡部云蛟蛸神社圭田

三十九束三畝田所祭罔象女也天平二年庚午六月始奉圭田神

事式祭等始也諸國圭齊録下總國部云五十石文間大明神領

相馬郡布川郷立木村友野因幡國花萬葉集卷十下總國部云文間明神社

領五十石いせ平大夫上例祭六月十五日九月十五日神輿を

交代す神主友野因幡別當神宮寺 祢宜 神宮七人 まさ

焼といふ事あり寅時許神前の篝火にて舊き御座の絹を焼く

奉納蛟蛸の蛸ハ罔象の義ふとれる字あるが後ハ蟲旁か

不書きさるが更ふ轉じて文間と爲り一なるべし

布川 古ハ存川と書きて豊島家不有千葉家不屬一數軍功あ

り一ガ常總軍記卷十五千葉家濫觴條云滑川龍臺の織田左京

男頼定を退退け銚子より海上取千葉印幡北相馬を取

り安食上下利根を限り八里を攻掠旗下一族最多助崎

寺臺大倉小見川東米野井長沼有川横須賀荒海布佐大森飯岡

馬加須賀圓城寺村田山部森戸神崎藤崎高鍋木石橋小石

橋廣岡青木伊能尾金田林長澤印西ハ口を限不旗下家臣夥く

四月上旬畧總州の千葉介利胤ハ畧村河原不著馬一龍崎士

守谷布川篠田一色小山近藤等の味方を待受け云云

岐家不奥山砦を奪ハれ一不因りて援兵を乞へども果さる

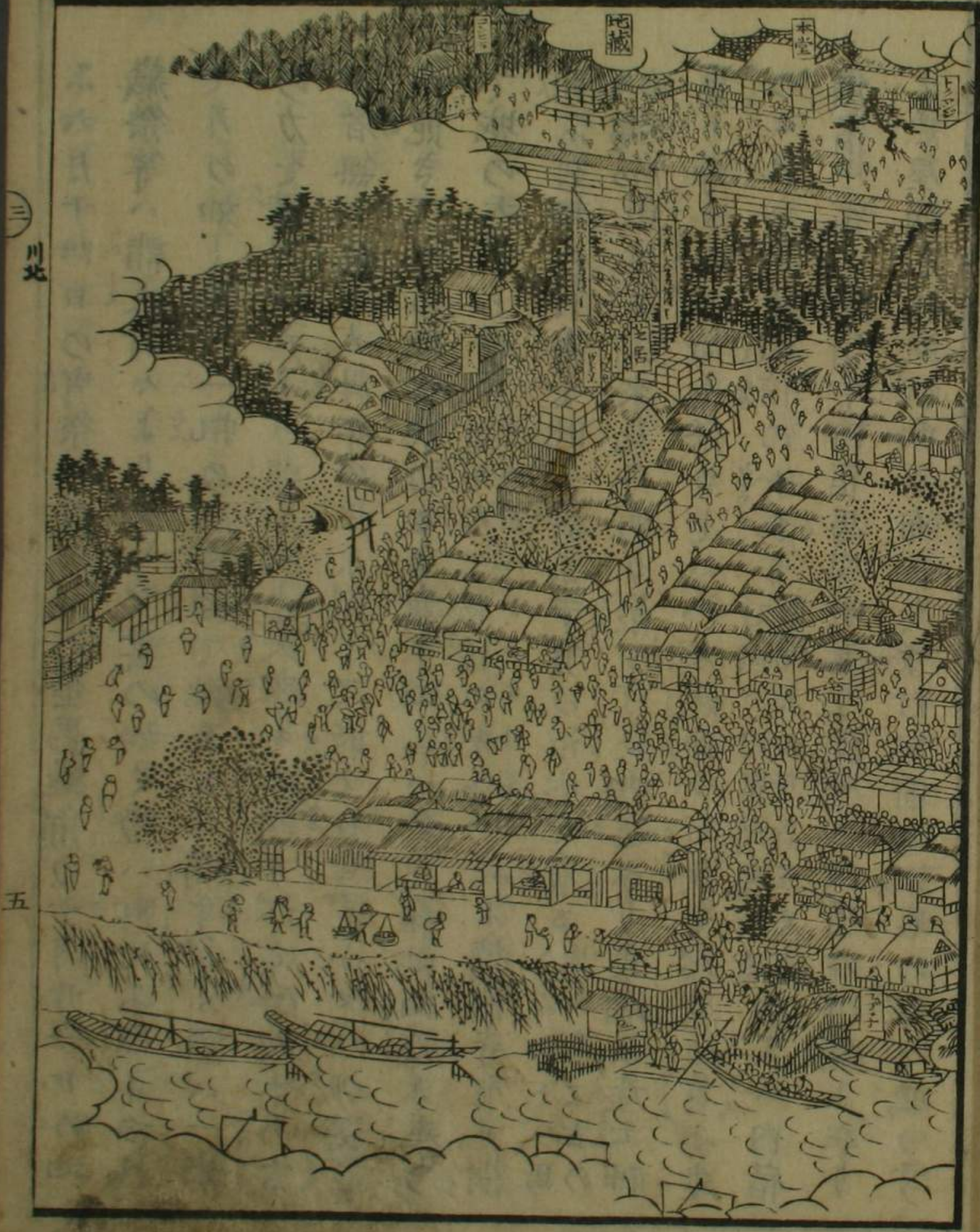
時常陸國河内郡足高ある岡見中務少輔の長臣栗林下總守義

長の計ふ因て岡見家不屬一その後小田原北條家不屬一その

落城の時同く家絶えたり鎌倉九代後記小田原籠城人

布川ハ一帶の丘山を背ふ一前ハ利根川不臨て街衢を列ね

人烟輻湊して魚米の地と稱する不足れり舊地ハ山の西北殊



三
川北

五



地藏市
十月廿四日廿七日まで
あり

カレヤ

不六月十四日の宵祭八月十日の金毘羅角力十月廿一日の地藏祭等ハ詣人村々より來りて雲の如く燈ハ町々不照一つれ
て月の如く魚ハ一帆の風を使って銚子より輸すべく酒ハ一葉
の力を借て江戸より運ぶべし大率その時すべて醉人あらざる者無れども昇平の化不浴して敢て狂せず小女ハ砂糖齋
不飽きてその他を求むる事無し山ハ金毘羅社西端不建ち
て城の大手と覺し道を夾て乾陞の狀あり次ハ德滿寺有り樹
間不利根の行舟を眺み遙手賀の沼水を看る場この山下ハ馬
馬場の中ほど不來見寺あり最も可畏古迹あり東端不産土神
あり句々廻馳命を祭るといふ又姥神の石祠を濱宿の首不建
つこれハ新井照信の女あり石祠ハ内宿濱宿の境南側不在り高五尺許町ハ内宿
濱宿中宿上柳宿下柳宿馬場町あり渡場ハ内宿の川端不在り
て魚屋場不相並び向不布佐を望む風前不酒客の喉を鳴りす

有り月下不騷人の舌を鼓する有り是を以て舟不下りてハ流
不枕すべく岸不上りてハ石不漱ぐべし而して後の山を望み
てハ豊島と新井の盛を想ひ前の川不臨みてハ千葉と岡見の
争を歎すけ不蝸牛の角石火の光あるべし今昇平の化不浴し
てかく暖不衣飽くまで食ふハ誰が恩ぞや

江戸の方向に在る雪の富士

海 珠山德滿寺 眞言宗常陸國信太郡大岩田村法泉寺末あり開
基詳ならず元龜年中祐誠上人中興すといふ本尊地藏菩薩湛
作御長七尺三寸 毎年十月廿一日より廿七日まで開帳して諸人不拜
せしむその間詣人羣集し商旅來會すこれを地藏市といふ諸
國圭齋録下總國新義眞言部云二十石相馬郡布川村 德萬寺
金毘羅社 地藏堂の西不在りその間路の左右不乾陞の迹あり
されバこの地城の大手あるべし境内不空居心經碑あり又こ

この地ふ於て毎年八月十日祭禮相撲ありていと賑へり
へつゝりと人のある本や官相撲 一茶

瑞

龍山來見寺 龍海院と號す開山獨峯和尚 天正十子諸國主齊

録下總國曹洞宗部云三十石 相馬郡布川村 國花萬葉記卷十下

家寺領 常總軍記卷十六云今布川ハ布川と改む來見寺といハ

禪寺あり下妻多寶院の末寺小て曹洞宗あり御朱印三十石あ

り昔ハ頼繼寺といハこれ紀伊守の建立あり天正十八年御入

國の後布川と改む頼繼寺と來見と改むとあり是ハ御入國有

て御巡見の折柄此處へ來りせむひ絹川るろ類して布川ふて可

然ハ頼繼ハ我來見の上ハ來見寺とつくべしと上意あり 中畧

又この寺の住職ハ昔遠州ふて能く知りせむひ僧ありし

ハ望を申すべしと仰有りしが堅固の道心人ふて嘗て望ふ

と申上なる故一ハ御賞美ましくて庭前ふ小き松の有りなる

を御所望ありその代として梅を社トさり今ハ御城矢來御門

の内ハ梅替松とて大木あり又來見寺ハ松替梅とて本堂の前

ふ在りこの梅ハ御朱印三十石を社トといハ因て布川の事を

松替里といハ由あり布川ハ御入國以後松平五左衛門近正ハ

下さる境内阿弥陀經碑背ふ下總州相馬郡布川村瑞龍山來見

府河城主豐島頼繼開創城主風慕洞山門屈請和尚以爲開山第一

獨峯和尚在小田原最乘日有降魔瑞而屈請和尚以爲開山第一

座開堂日寶有神龍雨之瑞故以爲山號取城主諱以爲開山第一

轉輪不退德三世日山和尚者參州岡崎人既爲龍海院住侶也

長生寺與三有舊知以慶長九年三月十五日賜寺領御朱印某

年御狩之日輿輦臨本院賞寺庭松樹與寺外河水廻流委蛇如敷

白布曰存河布川頼繼來見呼音相近今日來見白布廻流委蛇如敷

松樹矣寺稱來見河呼音相近今日來見白布廻流委蛇如敷

任持僧替庭松樹以御愛梅樹葦松樹移植之於御本城今本院於

尊崇御替松樹以御愛梅樹葦松樹移植之於御本城今本院於

等寶戴于本院云とあり也當時拜賜文衡山畫幅及御饌點茶供具

碑ハ中村佛庵の書あり

按ハ一家ハ豐島頼繼の文書寫を藏す左ハ載す

頼繼寺奉祀基知仍事

三川北

七

- 一 市西の内作屋々 十五貫五百文
 - 一 同所大森の内 二貫八百文
 - 一 存川の内 十貫六百文
 - 一 文間早尾の内 三貫七百文
- 以夜頼継寺被開基付至子孫に在る如行
 多末處可奉付如事件

永祿三年七月廿四

拜進頼継寺

衣許役者中

頼継判

按不豐島家の事常總軍記卷十六云豐島紀伊守ハ清和源氏ノ
 一ノて最名家あり 中畧 源三位頼政の子孫トハヘリ此の時ハ高
 七千石ありトウヤ今押付上江下江上曾根下曾根早尾大平
 北方羽黒横須賀等の村々有りその頃ハすべて存川領ノ一
 紀伊守が領地あり

又舊家新井氏あり同書卷十九ノ其の來由を載す云爰ノ常州
 新治郡小野崎の新井縫殿介ハ小田天庵の旗下ノて有りト
 藤澤籠城の時籠りて没落セ一が固より武勇の者ノて天庵の
 危急を見あからこの儘暫居せむハ勇士の爲ざる所ありと思
 ひ又々土浦ノ來り持口を固めむと申一なる故一トも大切
 なる搦手間部臺を固め忠戰を勵ま一落城の時切抜けて歸り
 本注この新井が先祖ハ岡見の先祖栗原太郎信勝の七男新
 井七郎信厚が末あり 中畧 常州小野崎トハハ新治郡の内
 一ノて谷田部ト土浦の間ノて土浦より 然と雖天庵滅亡セウ
 ハ遠一谷田部よりハ近き處あり下畧 然と雖天庵滅亡セウ
 此一トハ自立もあり難く佐竹多賀谷ノ降らむト口惜と思ひ
 なる爰ノ下總國北相馬の存川の主豐島紀伊守頼継ハ姨ノ
 一ノて頼継が粹主水半之丞トハ正一き從弟あり姨ト戀ひ一
 存川へ落來りたる不他人ありされバ差置きなり
 按不この後客分ト爲り陣代をも勤め軍功も有りて終不一分

の主と爲りしあるべし今その家存して系圖并ふ古文書數通を存せり下に載す

系譜を按ずる小清和天皇三代武藏掾源滿季男栗原式部後胤栗原太郎信勝保元平治之合戦官軍屬甚有軍功勇名依十子有之常州筑波新治信田三郡給之代々領之坂井信家信春野中瀬二郎信平住于谷田部信國坂井四り之八信家信吉栗林九郎信政山口六郎信厚住新井七郎信井信秀沼尻五郎住于信政山口六郎信厚住新井七郎信于坂信秀沼尻五郎住于信政山口六郎信厚住新井七郎信光野信吉栗林九郎信政山口六郎信厚住新井七郎信の後照信の代よりこれを寫す信厚十七代後衛照信初信治新井縫殿介常陸小野崎城主

信厚以來代々住小田家也小田讚岐守天庵氏治公十五代而天正二年二月廿七日爲竹田氏令落城滅亡矣依之引退小野崎之城而住居于總州相馬郡川矣奉遷座氏神白山權現令崇敬也其後通心於小田原八王寺城主北条陸奥守平氏照公屬幕下一萬石給之矣改號新井治部少輔源照信馬當家守本尊同郡柳戸邨觀世音菩薩也天正十年二月廿五日年六十而死

女 性端嚴美麗絶人容貌眉目如畫見者肅然改容矣天正三年二月夜曉利根之河端脫置行方不知依之數日雖尋河之上下水底更不見故上之曰我從龍宮假現照信之女在此界十二箇年後來可守新井之子孫繁榮云依之當家奉崇敬氏神則今姪女神官此也

照治 初治部大輔 後但馬守

永録七甲子年於于同國存臺房州里見義弘兵發與小田原戰時照治相隨相馬郡之軍勢被定于裏伐之大將忽里見取走照治從途中歸陳矣天正年中於于同國印西野氏照公催猪狩時牧場惣掛之役蒙仰也且氏照公鶴子二獻上之御祝喜之餘御直書給之矣其外至松田野張守狩野一菴宗圓皆川山城守皆川將監佐瀨七右衛門青野大藏牛田作右衛門増田新七等數多諸書物有之矣天正十八年豐臣秀吉公小田原發向此寺城之中曲輪守之討手大將加賀筑前守利并一菴共八王寺城之天正十八年三月廿三日終令落城自殺家同利長打向大戦天正十八年三月廿三日終令落城自殺也

信親 兵衛三郎 氏照公軍用諸荷物商賣奉蒙仰小田原往來之親那一艘十四十駄之御朱印被下置無患令運送通路也

繼信 初信重 治部

天正十八年小田原落城之後、尚令年人住于府川、府川古昔之城、主豐島刑部頼繼、天正十八年與小田原公共登山、高野山、慶長四年七月、繼之一字給之、則號繼治、後來子孫繼之意、故給繼之字矣、文祿三年、江戶蒙將軍家之命、諸國檢斷所相迎、至寬永十三年、諸色御用專勤也、于今御黒印數通有之矣、寬永十八年二月十七日卒、葬于來見寺、

以下畧之

今も代々の墓來見寺に存せり又系譜ふへる白山宮ハ來見寺より西方ある山下に在り柳戸村觀世音ハ手賀沼の南に在り姦女神宮ハ布川内宿濱宿の境ある家の側不在り

所藏古文書現存十通 北條氏照書翰 狩野一庵同
皆川山城守同 皆川將監同 牛田作右衛門同
青野大藏同 豐島頼繼一字書附

天正九年辛巳六月三日船一艘十疋十駄書附
同十五年丁亥九月七日傳馬一疋書附

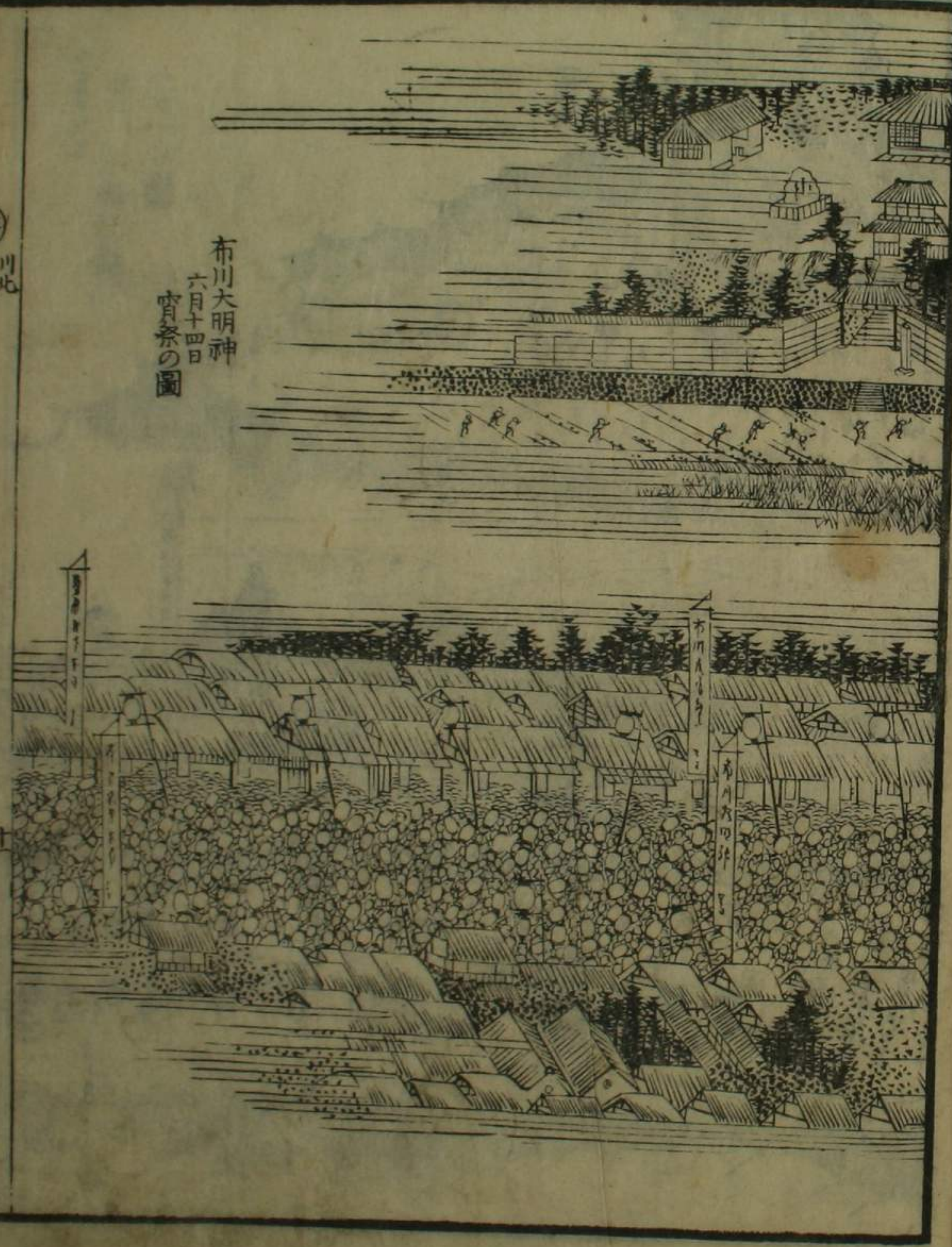
寛永五年戊辰四月廿六日傳馬一疋書附

以上

布川大明神 來見寺より東方山端に在り馬場町の上あり祭神句々廻馳命例祭六月十四日ノ切の假殿に神輿を出す十五日屋臺等を出し甚賑へり十六日神輿本殿に歸る時境内に尋撞の舞あり先庭上は船形を造るこれを御船といふこれに帆柱を立てるをツク柱といふ間許ハ舞人兩蛤の面といふを被り立附をたき竹弓を持ち柱に上りその上にて種々の狀を爲す觀る人戰栗すこの時船中にて八九歳の男子數人を以て地舞を舞ハ一む鶴龜鹿猿等の面を被る中にも蟒蛇の姫を吞まむとするを山伏の防護る狀を爲すハ素戔嗚尊の故事を學ぶるべし舞の狀笛鼓の囀等至て古風あり

三
川北

布川大明神
六月十四日
宵祭の圖



川北



六月十六日
 布川大明神帰奠并
 ツクマヒ圖





豊島紀伊守

布佐

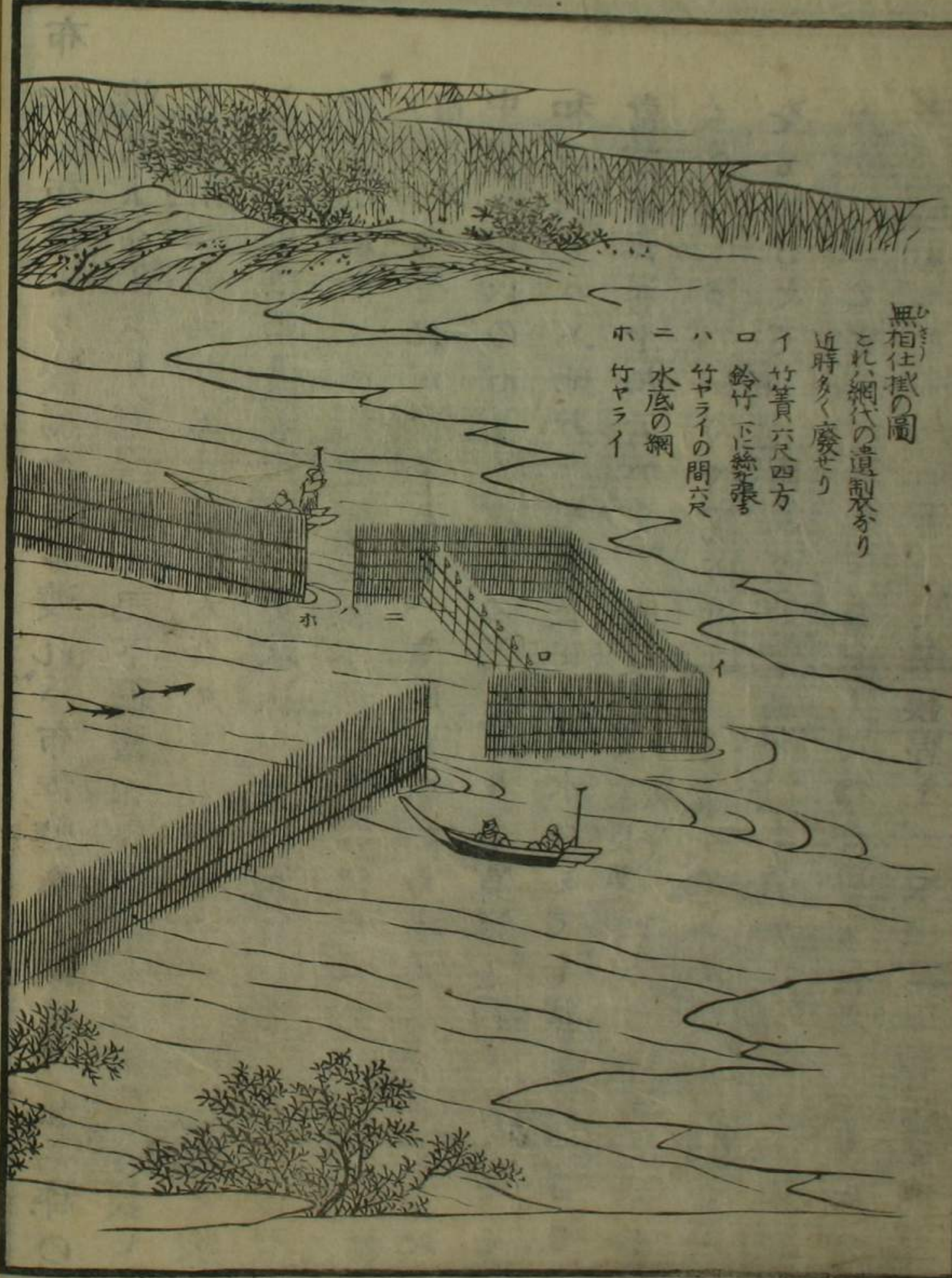
布川より渡場を南へ渡れ、ハ布佐郷あり倭名鈔相馬郡の
 郷名ハ布佐あり總國風土記下總國相馬郡部云布佐郡公穀七
 百六十二東三字田 假粟六百九十二丸五毛田 貢牧馬之駿
 と見ゆ古語拾遺ハ天富命更求沃壤分阿波齋部率往東國播殖
 麻穀好麻所生故謂之總國穀木所生故謂之結城郡古語麻謂之
下總ニと有レハ由來あるべき地名ながら未考へ得ずこの地
 中葉和田氏の有るて布佐の高臺より手賀沼へ行く方ハ今も
 和田前といふ地ありその後田部主水棲ミテ千葉家ハ屬せり
 常總軍記卷十九云かくて義長岡見家臣栗四方の調畧心の如
 くありーうバいざや勢を出して千葉を攻めかの輩の軍の援
 をも見むとて中畧岡見の手勢三千餘を差加へ都合五千餘騎
 天正十三乙酉年二月三日首途して乃存川へ押來て豊島紀伊
 守が岩へ入る頼継迎として羽根野まで家臣菰田與左衛門三



サケ川をより来り進
く竹ヤライの中に入り鈴
竹の下横に張りたる糸
に觸るれば鈴鳴るこの
時長竿を以て水底の網をあけ路
を塞ぎ左右の網か處とてしるあり
竹ヤライ竹筥の間あきたる舟を
乗込む處あり

三 川南

十五



無相仕掛の圖
これ、網代の遺制あり
近時多く廢せり
イ 竹筥六尺四方
ロ 鈴竹下に懸る者
ハ 竹ヤライの間六尺
ニ 水底の網
ホ 竹ヤライ

亦

十餘騎来て來り案内して城に入る 中畧 かくて義長二月七日
發向す先府川を發して利根川を渡し布佐を攻懸るその頃布
佐砦ハ田部主水ありたるが櫓上てこれを見る敵の兵を
の數いくらと計り難くそも案内の先手ハ誰あるむと見
たるふ旗の紋ハ丸ふ五桔梗を紺ふおきて白地あり銀の籠目
の馬印きりと閃きうらばさてハ府川の頼継が常陸味方
して攻來ると覺えまり豊島ハ案内知透されバ油断あり難
し先矢狹間を手配して弓鐵砲をかけよと走りて下知を
爲す然る不桔梗紋の旗と三釘貫紋の旗 今荒井氏にて丸ふ見
二釘貫の紋を用う
えうら櫓より聲かけて當手ハ府川の御勢をむけられ
と見えたる一流紋の替りたるハ誰人ふて御入らと申し
たる時不洗革鎧不星甲を着し葦毛馬不白鞍おうせて打乗り
白き麾を手に握り鞍蓋不衝立てこれハ常州新治郡小野崎の

新井縫殿介信淑 淑ハ治の誤
考ふべし と申す者ふてあり頼継とハ叔
姪の好ありて遊客たる所不頼継折柄居城離れ難く陣代と
て某に向て櫓の上の御款待近頃以て面白らず木戸を御
開有て見參ありむこそよき亭主振と申す物ふてハハめと思
ふ儘不欺きうら櫓の城の木戸を固めし若殿原堪へう収て一文
字不木戸を開て突出てたるを新井下知して相懸不懸て散々
不戦ふり未勝負分さざる不先陣ハ谷田部の岡見主殿が臣
遠藤又右衛門百五十餘騎横鎗不突入て微塵不なれと戦ふ不
城方固より小勢なれハ終不突立られ城不引入り弓鉄砲をか
けて防ぎたる義長遙不見て 中畧 布佐の押として牛久の家人
村岡半左衛門塙庄右衛門并高崎小莖の旗下都合三百人を殘
しその外ハ武者押して平岡小林笠神以下不ぞ向ひたる
芭蕉翁鹿島紀行云日既不暮う、る程不利根川の畔布佐とい

ふ處ふ着くこの川不て鮭の網代といふ物巧にて武江の市不
鬻ぐ者あり宵の程その漁家不入りて息ふ夜の宿腥

この網代ハ水路を妨ぐるを以て是を廢屯今川側ハ網代場の
名を存せり下ふ六軒新田あり是大森ある宮島氏の有かり
の宮島より來りこま天地渡あり渡守布川不在りこの處布
十年新利根川の入口を塞ぎ切を流しより布其處不沙岩
あり未全く化し畢りさるふハありぬども頗固くして小松鳳
尾竹卷柏石斛石菖蒲等を植うるふ便かり

六軒堀 六軒堀ハ手賀沼の下流不してその傍ある六軒新田よ
り名を得まりその利根川不落つる處ハ木下の前かり

手賀沼 印幡郡不在り東西三里南北一里許その兩源西の方あ
るハ十六大夫新田より出で呼塚より我孫子不行く間南ハ南相
馬栗野ある入道池より出づ又一源あり南相馬金山より出で

て北不落つこれハ淺間堤より東あり淺間堤その中を塞ぎまり一ガ今ハ
断えて島の如く残れりこハその長を稱めていへるる者ハ享
保十三年高田友清といふ人家財を捐て堤を築きて二万石餘
の新田を開き一也を高田堤といふ由を高田與清が松
屋叢話等何くれの著書不載せて殊不相馬日記卷三不
つきあせし手賀沼つみつむといふを言田の名ヤハかく

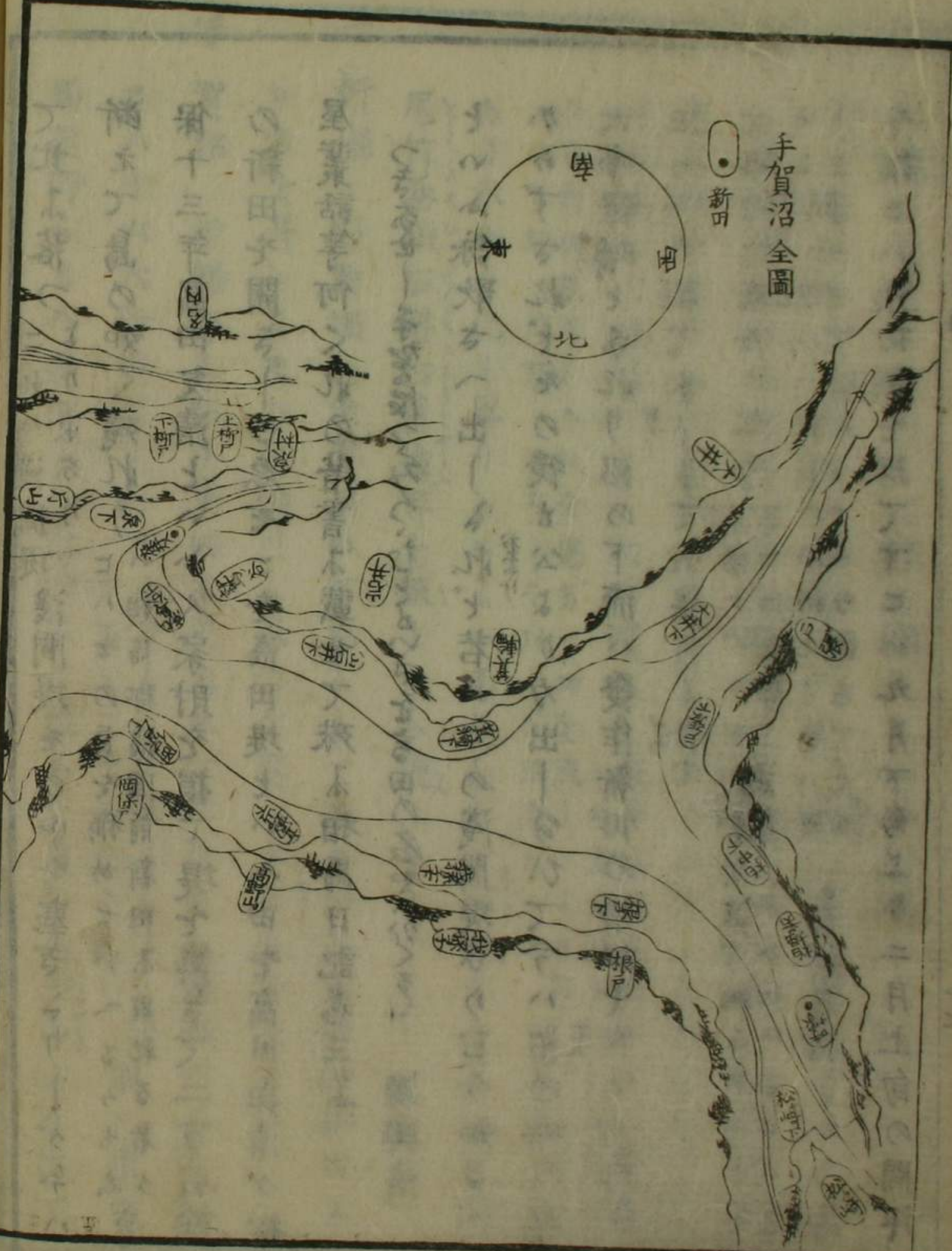
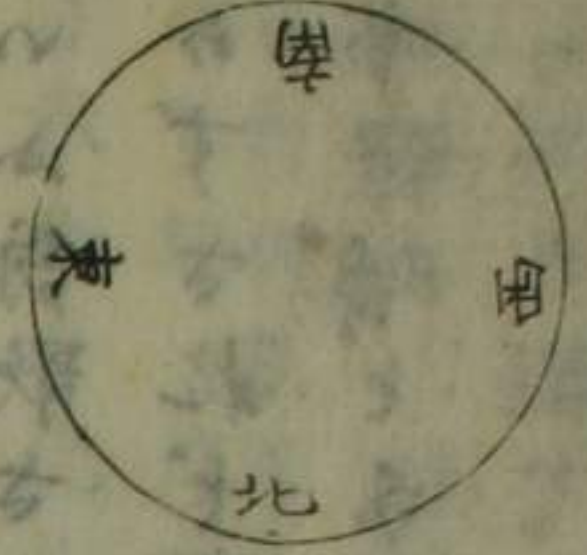
源與清

といふ詠歌さへ出いされど若ハこの淺間堤ありむ今知るべ
からずされどその後と公より力出いひて今ハ沼の畔の地
大率緑疇とあれり沼の下流ハ發作新田の飛地を夾之六軒新
田の傍を経て木下不て利根川不合す

この沼の産物ハ水鳥鳥類ナガアチ、ムササビ鰻鱺夜漁す故不ヨムナギ
とぞ鮎小蝦秋ハ麥園の培池と一多ハ乾蓴菜等ありその鳥
を捕るハ張切網を以てすこハ九月下旬より二月上旬の間沼

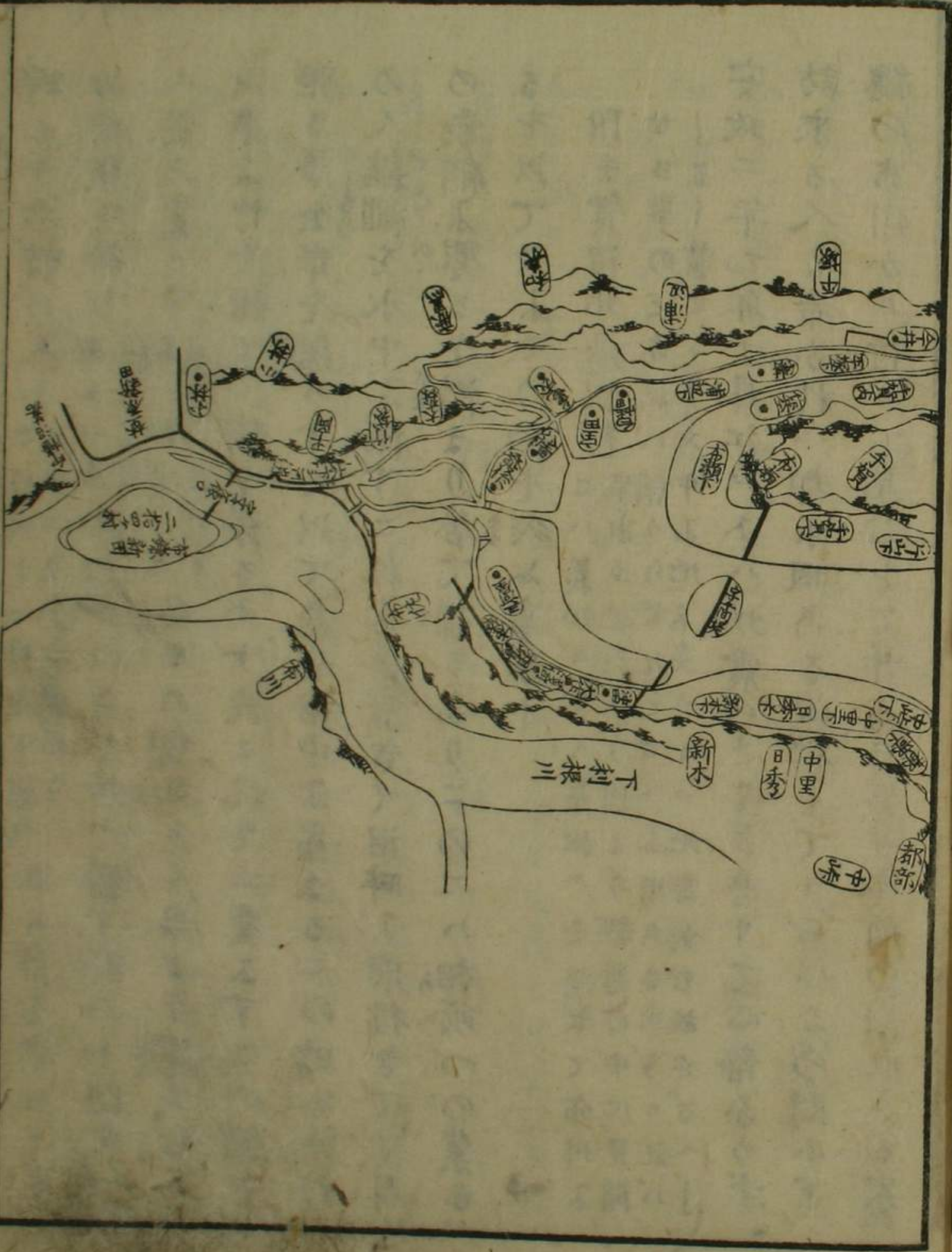
手賀沼全圖

●新町



三川南

大



畔三十六村の人々この内十一村を下沼組五日目を當日と定
め晴夜を待ち雨日ハ次布瀬村の告を待て發す網二十段を一
人前の業とす網一段廣十九各その信地あり岸より潭不向い
次第不竹を植て、網を張る不十段これを二重不すこの網を
張る事全岸を鬧ぐすを以て鳥皆沼中不集まるこの時布瀬村
の人藕繩もちまへを水中不流すこれ不再驚きて沼畔不飛行きて沼周
の衆網不嬰るを潜まり居て捕るありこの二ハ相須づの業あ
るを以て共不その約を爽不事あり

附手賀沼北邊紀行こハ義知グ友人某松戸を過ぎて布川不
せる事のこあれハ精來れる紀行あり固より經過の中に見聞
しる載せり文中不地名多うるハ地志好む故あるべし
安政二年乙卯十月江戸不ハ地震のさとき有りて心靜からず
訪來る人も希かれハ却不暇ある心地してさらバこの間不下
總の布川かり行きて見むとて廿五日吾が本所の崩れたる家

を後不見て深川高橋の東海邊大工町あるサイカチといふ處
より小名木川不舟うけて新川の宇田川柳庵がり行きとり主
いとく喜びて例の鮮魚求め出てつ、盃一ぱく巡れりさて主
が詠にて出させる詩

不料今有君來 萬事匆々且勸盃
定識探勝不可禦 輕舟明且向鴻臺
手と拙うらずぞ有りたるそハ大門と字せる舟人呼びて國府
臺より松戸の方不行くむと約一つればあり大門ハ桑川ある
葛西城古迹の大門不居るから不然名づけつ夜あけて例の大
門不船さ、せ妙見島を後不赤一松戸の方不赤る
枯芦はわきゆふよりおひさし何のああるも何のこある

かゝる歌ハ人の誰う誥ふべきと思ふうへらるれど實ハ此處
の眞景赤れハ後の思出草不載せり國府臺不到る
風ふうハ霜ふらばま石の村紅葉

かくて午時頃小松戸小著きぬ舟をハ大いより返一岸不上る
こゝも家崩れて人よりせぬといふ小金小歸る馬雇ひて乗り
りりこの邊大率水戸の君の御鷹場あり道の側村紅葉浅く深
く深めていと興あり

何の木もかの木もいそがねる式
孩兒拳の葉他のより色深く深きこり

於人よそあやそむよそのめもそちのいろはあらずて

寺ありそハ諸國圭齊録下總國卷小高七十石禪宗葛飾郡小金
卿萬満寺といへる者あり高田與清鹿島日記小馬橋といふ里
小慈雲閣万満寺といふ大寺あり靈驗尊き金剛神立させりふ
といへる處かりゆきくして小金小著きぬ一月寺も崩れりこ
の處ハ諸國圭齊録同卷檀林部小三十五石葛飾郡小金東漸寺
亦不曹洞宗小十石葛飾郡金卿慶林寺二十石葛飾郡金卿廣徳

寺三十石葛飾郡小金鱗崎村東福寺法華宗小十石金卿平賀本
土寺亦ど見えまゝ近き邊ふる栗澤小式内茂呂神社有りとい
へど得行りて止こりこの處ハ古千葉家の臣高城越前守の
城邑ありが後ハ原肥前守胤継の子二郎行朝これ小居れ
りそハその系譜不行朝又号友幸居小弓城大永年中真里谷三
河守武田豊三与行朝數歳争戦真里谷武田迎源義明合戦遂陷
生實城行朝者退入高城氏所守小金城と見えりその後矢葦
大膳の居處とかりが千葉家小背なる小因りて豊島紀伊守
成田八郎武田左近を以て伐りめぐる事常總軍記卷十六小
見ゆかゝる古迹も尋ねまじれど冬の日の短き小心いそ
ぎせられて前の馬夫小數頼之請ひて我孫子不行くべくあり
これバ見ずて止こぬまじりて小金原小入る許多の人の道記
小見一に野邊小春ども遊びて最面白き由ふれど寒風吹き

わさる夕暮ふれわが乗りさるより外ふの馬もあらずかの
鹿島日記ふいひさる麤脂鹿毛の神馬ハ今も有りやふと思ひ
續け行くふ枯野の景色緑の松ふき不ひてその状いそむ方ふ

いづちのつうふ目のてりそひて蔀繪ふ似る松をえいふ

野へ名残ふく枯れわされり風ふ尾花の波うと戦ぐ方ふ有り
松ハところふ合ひてや太く高くして上ふへ緑の枝蓋の如く
さー覆ひさり志せーて夕日の方ふ遥ふ富士峯を見出でさ
るえさいそめでさー天際ハ麤脂ふて一文字かきさむらむ狀
ふ平ふる間ふ常の形ふから思ひよりふ小く頭の方狹くて
詩ふも歌ふもいひ盡くすまーかり見る中ふ雪の如見ふされ
ーも灰の如くふりて入日の空も淡墨色ふ為りぬ風さへ少吹
出でさり

ゆく方ふさ路遠く望ふ小金の原の冬は冬ま

惜ミー日と暮ふルり足も馬の上ふてわが物ふらぬ心地ぞす
る道の傍ふ消石造る處あり鹽も多く出づといふ我孫子小著
きぬ小金よりハ三里ありいかで遅かりーふど宿の人々いふ
我孫子てふ名ハ古聞とえさる處ふりいかに城址やあるふど
問へど得知らず近き頃まで世ふ在りー勘七といへるハ大カ
ふてある時角力人を馬ふ乗せていさく論トて竹林の竹を折
り挫ぎて犢鼻禪と爲ーつ、カ競せむといひーうばいとらわ
びて角力ハえとらふふりぬといふ鹿島日記ふこ、ふ來る路
柏といふ里ふ手賀沼を渡るといひひされどわが親歴ーへ呼塚
ふて手賀沼の水源をわとりーふり曉おきて昨日の馬雇ひて
出づ水戸道の岐路あり右ふとりて高野山ふ入るこハ安永ハ
年五月仙臺嶺山君の



五月雨のをやこひまとうちくとりさごふええぬ遠の村里 徹山君
と詠めぬへるあさりふりいで異ふる事も無かりーやと問へ
べ今年ハ例より青頭苗多く出て梨李桃歸り花多く開き地震
かりー十日許前より雞埒ふ棲まで梁ふ上りてとふかく困
トこりーといふ風景よき處やあると問へば右の方ふる我孫
子新田子權現社ハ手賀沼をうちこー遙ふ大井戸張兩新田の
兩岸の上ふ富士峯を眺めて風景いとむ方無ーといふ日秀新
木を并せて芝原といふ常ハ此處ふて馬をつぎ代ふるかり右
ふ浅間山あり布佐村の有ふりその前ふる新田を浅間前とい
ふその東ふる相島新田の井上氏ハ開墾ふ功ありー家といふ
左利根川邊ふ布川の飛地ふる江藏地新田あり布佐ふ到るそ
の村ふて壺といふ處ふりこれぞ古の跡ふて今の村ハ漁村ふ
りーといふ處々ふ御林ありふを行けべ左ふ一里塚有り佐竹

家ふて水戸を領せし時の驛路の準ふてこれより龍崎不行き
ーといふこの邊ふ和田前といふ處あり和田氏の城址あり文
政二年の頃そこより石櫛を掘出ー、ふ中ふ長き刀銅佛と石
一片有りきその石ふ忍和田氏墓右傍不明應九年本月日不知
文政ニ乙卯歲四月建之と鐫りて和田ハ幡と稱ー布佐の正藏
院ふ祭りて有りとぞ猶行けべ利根川左ふ見ゆ去べー下り居
て懋ひつゝ去、らの物語す我孫子より布佐までハ三里十町
ありここのひの地震ふ布佐と布川も家損ねざりそハ皆井を掘
るふも地下の柔ふる處かりとげふ江戸ふても家の甚く壞れ
るハ古川の迹若ハ蘆場を築き固めざる處とおふーふ不思
へば今年ハ處々ふ彼岸櫻梨等の歸花多く開き栗材早く熟ー
殊ふ九月の晦ふハ鳥鳶中空ふ噪き行きーをさる前表とも知
らで十月二日の災ふ罹りぬる最うれ々ー川の向ふる立崎羽

梅不鹿島
治亂記の
手賀常
州麻生の
手賀ふ
てこの
手賀ふ
あらざる
べー

中等の村にてハヤカチふといふ蛇ども蟄しとるが蠢き
 出てこれと寒くて行きと得さりーハ九月晦の事と聞え布川
 ふて井幹の中不俯して聞けば數鳴りーハ十月二日の事とそ
 この道すから手賀沼數見えーを以てその周の事とを問ふ
 手賀沼の南の村々を名つけて手賀島といふ舊ハ五ヶ村ありー
 古ハ島ふや有りルん鹿島治亂記不故府中幕下小高麻生手賀
 玉造武田小川島名木ふど見えこれバ古き地名ふり此處不御
 墓場といふ處あり原越前守墓ふて子孫ハ篠原と稱し江戸不
 在り來りて修復を爲すといふ想ふ小金城不居とる原二郎
 行朝の後ふる尋ぬべー布瀬ハ千葉系譜ふる大介常重の傳
 不問大治五年庚戌奉寄進相馬郡布瀬郷於伊勢大神宮といへ
 る處不して布施ふハ非ず金山落の川の東不江戸より行徳ハ
 幡釜谷自井を経て布佐へハ大森木下へハ行く路あり香取日

記不白井より木下の岸へ行く不近き道有りと教ふる人の有
 りて龜成といふへ出づ左不手賀沼とて大ふる沼あり潮から
 ぬ海といひつべー細く長き堤をゆきくて木下の川邊不至
 るといひ者ありこハ大森の本道をバ經ざる方あり發作新
 田過ぎー弘化三年丙午の大水不菰の根の結ぼれとるが丘の
 如く流れ來り人家の庭ふ入りてそを除くふいと困トさりー
 とぞふ不問へバ印幡沼ふと有る事ありとを修めて葺田と爲
 一おバいかにと思ふありふ不行ハ布佐の渡場不出づ此處
 人家建續きていと賑一彼方ふハ布川の家々隙なく立並ひと
 りこの川寒き朝ふハ氷砕けて流れ來るといふ武藏の玉川不
 さる趣の説あれど彼處の玉の義ハ然らず此處の氷の玉の如
 くあらむふハ玉川といひつべくぞおゆるかくて布川不渡
 り中宿ふる赤松義知かり著きぬハ廿七日の巳時あり主ハ櫛

州甘繩城主あり一赤松次郎則村の後にて何の時不此所不流
寓せしやらむその始の確からず年ごろ利根川圖志編集の事
不勞きとる人あり主妻竹待付て甚く悦び長女のみことといへ
るそが夫ある印西吉高の惣右門まゝ二男宗碩ハ小貝川の西
ある高須不居とるが共不その邊にて漁せる魚蝦持來りて饗
す季女のちうといへる今年十二あるが文選素讀一さして來
侍す猶利根川圖志の成功不心合せて白井城圖作りとる大川
書成が子不て此地不養子として來れる杉野周治をと訪ひつ
こ、ら見廻る程不家ごとの園まゝ庭の中不藁かど不て小社
を作り幣をさし前不秦皮かどの樹を植ゑ注連をはりて有り
氏神社といふ大率九月の内心の儘不日を擇びて祭るとおむ
こハあべてこの邊不する事不て舊の傳こそ絶えされ庭中の
阿須波神不て田舎不ハ古風の残りとる最めてと一又この邊

の寺社不ハ絹不て三角の袋を縫ひ下不括猿折鶴かど連ねて
懸けて有りこハ女子の縫ひて納むるといふこハ骨董集不見
えとる浮世袋あるが江戸不ハ早く絶えとる不此邊不遺れる
といとゆくとされハ旅路ハ物學不益ある事少からず又農具
雜器の見る目新しきとあれとさのミハ出さずおむこの邊ハ
古あべて文間と言ひりされバ子飼川落口よりあふとを小
文間といひる不因りて文間川の名と起れりそハ常總軍記
作れる松好菴紀卓が著せる掃溜集卷三不美丸といふ人の説
をあげて下總國中ニフミテ川トイフ名所ハ出テタレハ歌
所ニテモ今ラス此度此國へ來りテ考へ見レバ今砥臺川トイ
フ川ニ相違ナシソノ故ハ文間小文間ノ間ヲ流ル、川ナレバ
文間川ニ違ナシといへりか不考ふべし主の意最切かりされ
ど家の事も思ハるレバ下畧

川菜

水苔 倭名鈔

古今集のふらふらもあはれきり



春若葉を
生ド長さ
一尺斗り
六七舟水中より
白き花を開く川沿ともあり
水深さあはれきり

大森 この地古千葉家不屬一中頃豊島ふも屬せろろ布川來見

寺の寄附狀ふその名見ゆ今ハ八幡釜谷白井よりの通路不
て稻葉君の陣屋あり此處ハ印幡郡の地あり是より木下河岸

雲冷山長樂寺 大森不在り寶泉院と稱す慈覺大師御作の觀世
音あり 縁起云下總國印幡郡大森之鄉雲冷山長樂寺本堂之千
當山境内地勢異他先東南谷廣岸高風聲響松樹常増行者觀
念西北岡平浦近鳥音和湖水浪恒勸道人心大師關東向次修
此所御一覽有之精練功積修行德累勝地思召暫日於此所御修
法有之殊當州國師歸依大尊尊高徳又無雙中畧其御修法間
千手千眼觀世音尊像一軀并持國多聞侍二天以上三體大師
手自刻彫給安置此御堂中畧于愛中比當所里之人森内家吉云人
有之殊尊敬當山本堂修覆大鐘鐘樓再造脇侍二天絲色等建立寄
進其數甚多私云當所古者傳説云當寺是古昔慈覺開基立寄
而寺内房中繁榮也衆徒十二房列檐並亮每日勤行以課役勤之
然近代亂妨時節悉皆亡滅所殘唯一二名帳歷然云内記又應安
錄嘉吉二年脇立絲色時節衆徒十二人各隨而見堂内記又應安
二年森内家吉が寄進せる小鐘あり 高二尺三寸五分龍頭
文左不載す

敬白

下慈國植生西大木林鄉

長樂寺鐘禱事

右志者為天長地久

御願圓滿伽藍女穩

興隆佛法 殊富地至

沐息笑延命

別者信心檀耶永吉

現當二世悉地成就

寺中老穩僧雲敏示昌

惣御内兵衛泰平諸人

秋樂元邊太願也

應安二年十月六日

檀那永吉 寂

大工河内推守

鹿^ろ黒橋^{くろはし}

大森鹿黒の間不あり古き唄入。お^大不^森り^名めん^所一^鹿か

くろ^黒を^橋一^面おも^白ろ^水や^送之^流川^流が^ささ^さふ^かが^ささ^さる^此此^河の^水源^東東

惣^そ甫^甫新^新田^田の方^方より^流流^出て^西西^手手^賀賀^沼沼へ^落落^つつ^利利^根根^川川の^流流^とと

水^逆逆^行行^まま^るる^もも^急急^ささ^さふ^流流^るるとい^云云^ふふ

官^官嶋^嶋勘^勘右^右衛^衛門^門とい^ふふ^者者^ああ^りり^先先^祖祖^ハハ^安安^藝藝^のの^宮宮^島島^よよ^りり^來來^りり^此此^邊邊

の^地地^をを^多多^くく^開開^きき^一一^とと^云云^りり^今今^六六^軒軒^新新^田田^不不^安安^藝藝^のの^宮宮^島島^よよ^りり^移移^りり

祭^祭り^一一^{とい}い^ふふ^弁弁^天天^のの^社社^ああ^りり

竹^竹袋^袋城^城山^山 木^木下^下の上^上不^在在^りり^今今^とと^故故^井井^のの^跡跡^ああ^りり^井井^内内^{とい}い^ふふ^一一^家家

の^古古^書書^不不^ここ^のの^城城^のの^事事^をを^いい^へへ^るる^者者^ああ^りり^寫寫^しし^てて^ここ[、]、^不不^出出^ずず

表^表書^書 當^當々^城城^のの^石石

竹袋御木下川をた

城者

延長七祀歳佐倉城主

三川南

七七

圖畧之

右水神下より河をさ

りて其所の舟おぎをさ

りて其所の舟おぎをさ

りて其所の舟おぎをさ

水神社

竹袋城山東方半腹不在り古ハ亦不在りといふ
元徳四年の板碑あり千葉家の臣佐藤氏建つる所といふ



木下河岸

竹袋村の内あり常總軍記卷廿云今木下といふ名高

き所下利根川の岸あり是ハ竹袋より利根木を下すの名

かり然る小木下といへハ江戸も隠かく竹袋といふ知る人

無一云古この地纒ふ十軒をかりあり一が寛文のころ此處不

旅客の行舟世不木下茶を設けたる不因りて甚く繁榮の地と

爲れりその鹿島香取息栖の三社不詣一及び銚子浦不遊覽す

る人多うればあり問屋七郎左工門六の番船を預り旅人の煩

勞をささく

安永八年五月仙臺君の鹿島道記云前畧今日も日高く木お

ろし木つぎぬ十百木おろしを出て今日ハひめも舟路ゆく道

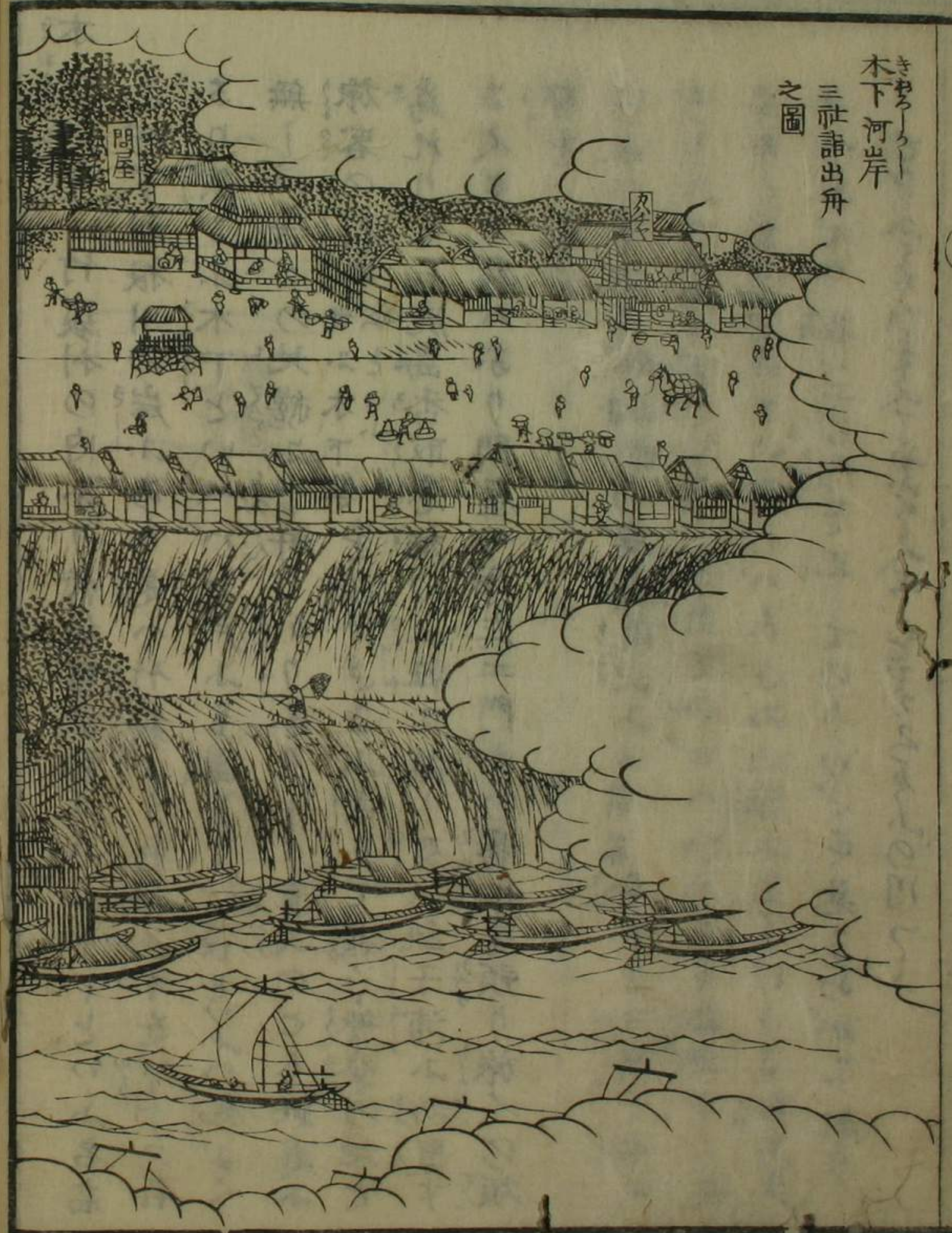
となくまづ河岸のぞめばおさみの旅不まうけたる船あま

とつあがり各二三の列を正してのりゆきを見るめがちぬり



三

三十



木下河岸
三社詣出舟
之圖

むらさきのとりのかげしねをひねもてるあまのつらさるはつ

里のあげやまのハワづもあつたをさ里の翁までこのふね
よをひえむとてきたれりこの刻むりより空を晴て昨日の名
跡あくをうごまて見るとさまてなごめあつたあのみあた
りよて細ひうて目の茶ふ鯉鮒あど漁を中ふ鯉ハ二さ
くふあやうもあのみ川みてとるとはよあさみのしとていさり
まると翁の翁ハぐわしそいふ志がー田けを芦の翁あまつぎ
たると風ふごだれあひくるさまごーく身も

川風ふ波おろろこれあつた家もむをだばあひくさまごー
貉池 并貉坂 木下河岸より竹袋へゆく道の左ふあり佐倉風土

記ふ在印西莊竹袋方百三四十歩中有葦菜池頭有貉坂焉東国
戦記所謂狸坂及狸池是也今ハ淺くふりて葦菜かー芦菰ふど
生茂り池の形のこふり堤を越て向ふの山ふ上る所を貉坂と

いふ是より竹袋本村あり

稻荷山神宮寺 竹袋ふ在り三寶院と稱す古ハ龍腹寺ふ屬せー

とあむ嘗て一家ふて當村三寶院開基記といへるを見り下
總國殖生西曰井領印西莊竹袋郷稻荷山神宮寺三寶院者應仁
元 丁亥 太 按ふ太歳ハ木星ふて譬へハ太歳在 二月日開基祐
善坊慈眼庵ヲ取立云と有りこの下ふ慈眼庵を神宮寺と爲
載せられどそハ寺ふも舊記の絶えたるふ因りて吾が本尊如
家ふのミ甚く秘する事とて寫す事ハえ許さばりき
意輪觀世音 御長五の腹藏ふ在りー最勝王經等を見り皆蠅
頭細書ふりきそぐ中ふ佛説宇賀神將經の末ふ

本願聖竹袋神宮寺祐善社
下總國殖生西 齋内小倉村
應仁元年 二日始造本尊記

地藏堂 別所ふ在り金龍山寶泉院地藏寺といふ原或部少輔の

石神社別所地藏堂より西十丁むくり山の半ふくふあり陽石の形ふして高二尺四五寸建仁□□□と多きり同村岩井彦右工門の氏神ありといふ

雲林山瀧水寺 瀧村ふあり本尊藥師如來仁明天皇の御願所兼和年中の建立門の二王運慶作といふ国司藤原朝臣手狀を藏む年号不詳又美應三年相馬小次郎平貞胤の寄附狀明暦四年同昌胤の寄附狀等ありまゝ古鐘あり建武五戊寅八月八日と

鳴澤 同村西の方ふあり佐倉風土記ふ云傳水脉潛通村中此水盈則村井皆盈此水縮則村井皆縮矣

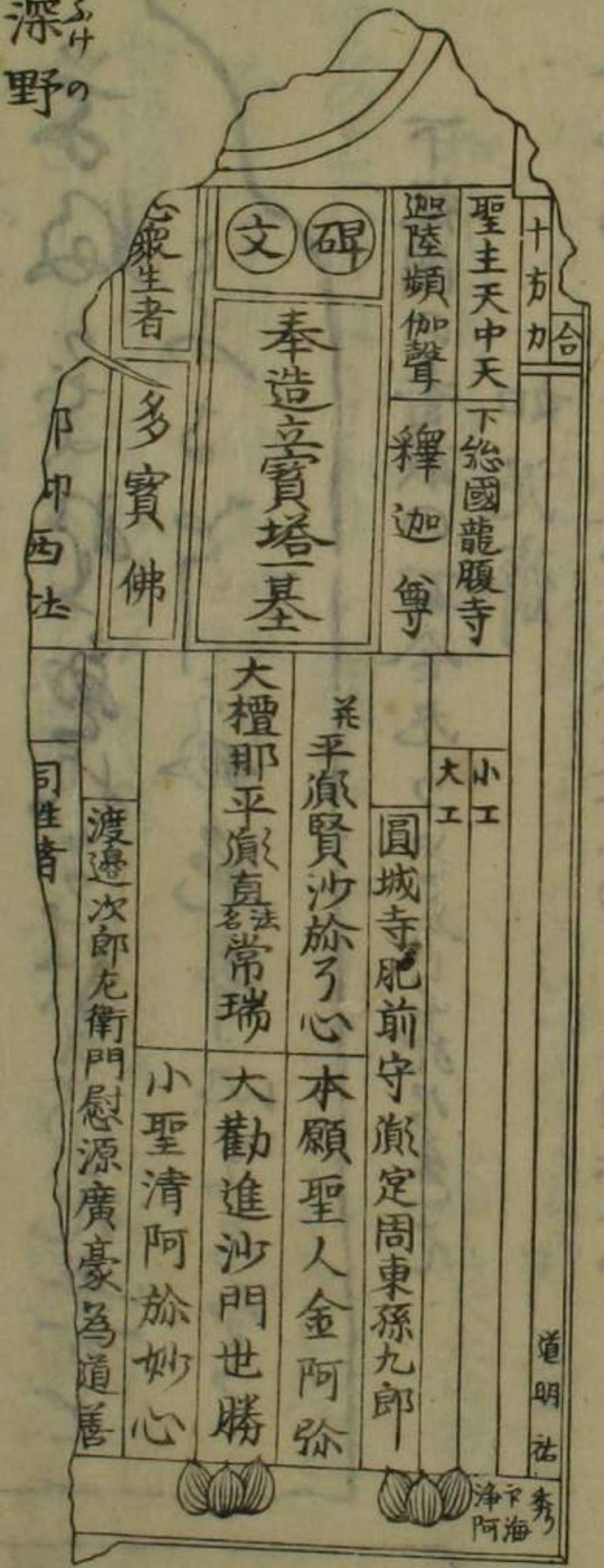
天龍山龍腹寺 龍腹寺村ふあり本尊藥師如來を安置を側ふ地藏堂あり大同年中飛驒工匠建るといふ門の二王左ハ慈覺大師右ハ丹慶の作といふ此寺舊龍福寺と名く釋名上人雨を祈り

一時龍死して腹を墜むの地ゆゑふ亦龍腹不改とりとぞむる志ハ七堂伽藍ふして村中ふ二十五坊を置けり遠近七十五箇寺の本寺ふてむ大寺ありと云り其後兵火の為ふ灰燼とあり一夏東国戰記不見ゆ去文政元年七月又々火災ふ罹り一時銅の寶塔棟札一版を得たり則ち領主稻葉君より新ふ函を下し是を藏む其函ふ記して曰下總國印幡郡龍腹寺寶塔棟札一版以銅作之長一尺八寸幅八寸表背鐫字上頭左邊破缺不全背面細字漫漶不可辨嘉吉二年壬戌等字猶可讀其詳不可考據天和元年僧智祐所撰勝光寺畧緣起龍腹寺舊號慈雲山延命院大同二年九月曰僧空海之奏詔其後慈觀建七堂伽藍於下總國印幡郡賜號曰慈雲山勝光寺延命院自後世為勅願所延喜十七年大旱奉詔祈雨驗有龍之異因改賜號曰天龍山龍腹寺嘉吉二年國司千葉氏脩其

堂宇建五重塔永正五年二月塔無故倒時主僧覺道勸千葉氏伐北條氏而自聚兵於寺將以援之北條氏聞之八月遣潛兵夜襲擊燒滅之覺道死寺廢者五十餘年至天文十九年千葉氏復建諸堂以再興焉而此舊不及十之一云後二百五十餘年文政元年七月寺僧不戒火諸堂盡災於灰燼中得斯棟扎龍腹寺村以吾藩移封之後猶錄于別邑大森治郡奉行臣八太高之代官臣春名復等慨古蹟之湮沒喻主僧取棟扎以進覽公歎其漫漶不可續而悅舊物幸存一覽之餘乃新其函以還且使高之命主僧慎藏勿喪使臣楸記其事於函臣楸謹案棟扎蓋塔之上梁文也嘉吉二年壬戌距今年丙申三百九十五年平胤直高見王之裔千葉臣常胤八世之孫滿胤之子為兄兼胤嗣無道臣屬多叛東氏圓城寺氏千木氏木村氏等爭推相分為二構兵康正元年八月十五日自殺于土橋阿彌陀堂胤賢及圓城寺氏渡邊氏周東氏即其同族或臣屬也厚二分

天保七年歲在丙申十二月丁卯

儒官臣本多楸謹記



草深野

在印西莊見于東國戰記此原也東西六七里南北五六里六町環野村凡十餘鑪田也船尾也結緣寺也松崎也吉田也岩戸也大迫也角田也造谷也荒野也俱在草深野南起於坤終於震馬和泉也鹿黒也大森也別所也小林也瀧也龍腹寺也皆在草深野北起於乾終於良馬西僅通手倉野者總稱之富小路正三位或部卿藤原貞直卿有詠歌尤小

富小路如泥齋藤原負直卿

草深丸山觀世音境内之碑

草深野鹿 正之位負直
子ぬりまはぬれまはあ乃花妻と
ふるといぬ色身いそら

下総國の香取の百合丸うとあら花をさそ

如泥齋

百合丸ふゆりてふれはち登其葉のまれ乃香取の名をけき

はまふをひ出く淨を思いつまきんふたもくるは歌とさほり
はらうけふさ残過くまうこひのあやうりこふと忘れ
和一まゝとさ

草笑香取百合丸

雲の上たのはらより一七賤名も四のふたはくやきこえこらむ
を一子明之今年文月之始都より

如泥の君はみまふまうりくねくねをりなるあともみふなう
こころめし舞笑といふ舞とさへ下し終りぬ母屋の長押ふ
かこへて扁額不せよとて賜をさるまとの所ふあやう
一けふきと一物うこる残きこて

俳諧歌場紀真類

花知ふふまはなはな深き百合丸形ひ乃玉のつゆ

二世

草深野鹿

翻園香取花笑

咲萩乃色平いそれま書とさる草深野鹿を鹿は聲

印西合戦

常總軍記卷二十云かくて

義長見家臣栗

兵を屯

めて竹袋ふか、つて平岡へ出屯でふ小林ふいさる小林十郎

元衛門が籠り一砦を責うごう天正十三年二月七日先陳府川の豊島

が陳代荒井縫殿助豊島が老臣根本勘助銀の小田原笠の馬志

る一を真先ふ立て関を造りかけてせめ勤々す小林ちつとも

さ日がむして敵をちろくと引付て弓鉄炮を一同ふをふ一う

け々まきバ真先の兵三十餘人矢庭ふ射倒されて人を拵ふ取て

ま、み得ず小林是を見て時分ハよきぞや突くづせと自らら

白糸の鎧不同ト毛の甲を差し鳩毛の馬ふ梨子地の鞍おうせ

打のり十文字の鎧をひねつて我ふおとらぬ若者八十餘騎前

後尤右ふ立からべ天地もくづる、斗りごつと叫て突出る

ふさしもの先手つき立ちらき人あどれをついてくづきたる新

井縫殿さいを打ふり蓬一人々城兵はとづりの小勢ふるぞ取

あめて一人も残さず討とるべいと志きりふ下知をふ一々

共引立一兵のくせと一返一もせむ逃そ一の備ハ矢

田部の老臣遠藤又右衛門百五十餘人替つて突うへは小林是

を見て敵ハあら手ふるぞ附入ふせらる、あと兵をまとめて

城ふ入るその進退のまこやうあるまおのまが手足をつうふ

が如く小林下知して弓鉄炮を雨あられふむとく打うけ

うハ遠藤も退きて、其日の軍ハ果ふり明きハ二月八日義

長下知して三の手四の手ハ笠神松虫ふせめり、る笠神岩井

庄太夫是を聞て城より三斗り張出して待りけり三手の

大將ハ蝦原次郎三百餘騎相が、りふか、つて関をあげ弓鉄

炮をそ仕うけりる笠神二百餘兵隠ふ閉て待りけり蝦原次

郎下知しるハ手勢百五十騎ハ笠神う備の正面を責べ一殘

る百五十騎ハ横鎧を入べ一敵ふ増り一勢を持て後陳へ軍を

譲らば何の面目有べき突破せよの共と真先馬を進て
乗出せ其手の軍兵何うハ以て猶豫べき眼をいらけて突懸る
笠神勢この勢へき多き一裏くづれて乱一うハ蝦原が勢
大いさんで微莖ふかれと戦ふさり斯る処へ松虫民部三百
餘騎黒煙を立てせ來て笠神を助け火出る斗ふ戦ふより蝦原
が勢心ハ危とけふもやき共戦ひはうき一兵ふれハあら手の
民部ふ突立ちきと川とくづれて引退く四備あり一櫻井舎人
佐野早人三百餘人替て突りへも双方名ある勇士ふ一て名を
を一命を、一まず今日を限りと戦ひたり印西勢五百餘騎
岡見勢六百餘兵入ちがひくく千騎が一騎ふあるとて一足
も引べくら次と西ふむらめき東ふあひま巳の刻より未の下
刻不及べども勝負ハさらふつろざりなる天晴千葉と岡見の
地あらそひらふを限りと見へとりなる義長遙ふ是を見て自

馬を乗出千餘騎を長蛇ふ立て二十備ふ分こり是五十騎一備と
大鼓を鳴して神出き其有様誠ふ自余の備と変りはりてその
號令の正しき度敵も味方も感激せり流石勇猛の千葉勢此
備ふ蘇立ちらき四度路ふ成て見え一うハ義長大音あけて軍ハ
志をま一たり開をあげよと下知さきハ惣勢一同ふとつと閑
ぞあげこりなる是を聞て印西勢いよく心散乱しておのく城
へ引入りたり岡見勢猶も續て城を責んと返りけ一を義長大
ふ制して此邊の砦を責るハ全く勇を止めをのこて雌雄を
変るふ不及ハ次其故ハ千葉方の小砦五十八十責ぬくとも全
の勝利ふあらず佐倉城を責落し香取郡千葉郡を平げせんハ
大利とハまべらら次他國ふ責入さる合戦味方七千ふを死次
千葉ハ主戦ふ一軍兵二万を過より一人ふても益なく味方
を損せよ加勢まへき味方なく敵の重地ふ入て死んど越度を



三川南

三十八



玉藻齋
自秀畫

とる夏あるべし誠の勝利ハ佐倉香取千葉不あり無用也とて
勢をまとひ松虫の墓不陳して大う、アを焼夜打の用心して
夜を明き是義長軍旅のかりこき所あり斯て義長休足して
軍の工夫をあらうなり以下松虫の

荳原新田 印幡沼の比畔あり里人十四ヶ新田といふ十四ヶ村あればあり

此地始ハ笠神村御立荳原とよかへ貢米七十五俵づつ上納せ

一荳原あり其頃ハ木下問屋仁右衛門下より東南平岡小林

山さより印幡沼まで見通し皆笠神荳原と唱へたるよ

古書不見えこり其後寛文二年新利根川堀割の節川筋不當

村々々此所へ替地仰付らる十四ヶ村とあり寛文十一年

圍堤出来同十三丑年御高入不成一といふ

吉次沼 荳原新田の内行徳新田といふ所の堤の内不あり云傳
むろ一金賣吉次信高兄弟陸奥國不往来して此所を過隣村救

原村不荒神左近といふ強盗あり吉次兄弟を殺して貨を奪ふ
土人墳を作り樹を植て跡を去る次是を吉次の墓といふ寶永
元年の洪水不此所の堤切墓堀まぐはれて押流さる其跡方
二百歩をかりの沼とある今是を吉次沼といふ此沼の深さ知る
隣村中根村戸崎といへる所不觀音堂あり十一面觀世音あり
是金賣吉次の守本尊ありといふ靈驗あらたあり

